The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	映画『人生は楽し』のムエゼ・ンガングラ監督に聞く
Author(s)	梶, 茂樹
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1990, 1, p. 176-190
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

映画『人生は楽し』のムエゼ・ンガングラ監督に聞く

梶　茂樹

去年（１９８９年）の１１月１９日から２３日まで、東京でアフリカ映画祭が催された（主催：社団法人アフリカ協会、ＦＭ東京、講談社、後援：外務省、国際交流基金）。出品された映画は、『人生は楽し』（ザイール）、『タバタバ』（マダガスカル）、『ゲリセール』（コートジボワール）、『わがアフリカの夢』（ガーナ）、『テスタメント』（ガーナ）、『モルトゥ・ネガ』（ギニア・ビサウ）そして『オリ』（ブラジル）の７本で、５日間の間に毎日これらの中から原則として４本が上映された。

私は、その時はザイールに行っていて、日本にいなかったのであるが、出発前に、この映画祭の事務局長を努められた白石顕二氏から、ベルギーに寄るなら『人生は楽し』のムエゼ監督にインタビューをしてきてくれないか、と頼まれた。彼はザイール人であるが、ベルギーのブリュッセルに住んでいるのである。そして、私が８月の末にブリュッセルに着いた時、彼はガボンに行っていていなかったが、彼の奥さんによれば、話は通じているとのことであった。ただし、ブリュッセルに帰るのは８月の２９日であり、これは私のザイールへの出発の前日であった。

インタビューは２９日の夜、ブリュッセル市内エーテルベック地区にあるムエゼ氏の自宅で行われた。彼は、前日、夜行便でリーブルヴィルを立ち、当日の朝帰宅したばかりであった。疲れていて恐縮だとは思ったが、こっちとしても、これしか時間的余裕はなかった。

このインタビューはテープにとり、日本語に訳して、白石氏に送った。そしてそれは、アフリカ映画祭’８９事務局編集・発行の『アフリカ映画の新しい波』の中で、「ヨーロッパ文化を越える新しい文化の創造」と題して紹介された。ただし、そこではスペースの都合もあり、かなり切り詰めた内容になっている。実際、インタビューは５０分にも渡り、これを全部紹介することは、あの中では無

理であろう。

以下に掲げるのは、その全文である。改めて公刊する必要があるかという気もするが、まず、ムエゼ氏の話はアフリカの第一線に立つ映画人のなまの声であること、そしてその内容が、氏自身の生い立ちから、ザイール、また一般にアフリカにおける映画の状況についてかなり具体的なものであるため、われわれ馴染みのない日本人には新鮮であると同時に、貴重でもあると思われた。それに、氏自身、全体が活字になると期待していたふしがある。

インタビュー記事を掲載する前に、この映画（１９８７年制作）の粗筋を簡単に紹介しておこう。田舎の青年クルは、ミュージシャンになることを夢みてキンシャサに出てくる。そしてナイトクラブを経営するパトロンのハウスボーイとなるのであるが、街で出会った美しい娘、カビビに一目ぼれしてしまう。ところが、パトロンも彼女をみそめ、第二婦人にする。このパトロンは、第一婦人との間に子供がいないのであるが、これが第二婦人をもらう一つの大きな動機となっている。もっとも、占師から、子供がほしかったら３０日間は彼女に触れてはダメだぞと言われているものだから、さわることもできない。愛の証に、星形のイヤリングを一個渡し、もう片方は、今は何のことかは言えないけれど、まじないの期間がとけたら渡すからね、とかなんとか言う。

カビビちゃんは、金持ちのパトロンと結婚はしたものの、クルのことがやはり気にかかる。そんな二人の気持ちを察してか、パトロンの第一婦人は二人の間をとりはからうのであるが、パトロンの怒りを買い、カビビは実家に逃げ帰る。パトロンはクルに、カビビを連れてこいと命じるが、なかなか要領がえない。そして例の３０日が過ぎた時、パトロンはクルにもう片方のイヤリングを渡し、これをカビビに渡して来い、そうすればわかるから、と命じる。クルはカビビと出会い、そこで二人は秘めていた愛をはきだすのであるが、ベッドで寝ていて、クルはなぜかパトロンが彼に渡したイヤリングを、自分の愛の証としてカビビに差し出す。せっかくクルと一緒になろうと思っていたカビビは、裏切られた思いがし、クルを平手で殴り、泣き出してしまう。クルはクルで、もう生きていても意味がないと、首吊り自殺をはかるのだが、幸い、ロープを結び付けた木の枝が折れて一命をとりとめる。

ちょうどその時、パトロンのナイトクラブではテレビの実況中継が始まろうと

していたのであるが、バンドの歌手が倒れて危機的状況。そこで、クルが時々歌っていたのを思い出し、パトロンは、まだ目を白黒させているクルを連れて来て歌わせる。最初はフラフラしていたクルも、歌っているうちに本領を発揮し――それもそのはず、このクル役の男性はザイールの有名なミュージシャン、パパ・ウェンバなのだ――、そして歌手として契約をかわす。そこにカビビも現れて、めでたし、めでたし。いわゆるハッピーエンドというわけだ。原題は、フランス語で LA VIE EST BELLE（人生は美しい）であるが、『世の中バンザイ』と訳してもいい内容だ。

この映画は、今までのような、例えば独立の問題や文化的アイデンテイテイーの問題を扱うといった、シリアスな社会派映画とは違う。愛あり、歌ありの、アフリカではめずらしい娯楽映画だ。しかし、キンシャサという都市に住む人々の生活を見事に描き出していて、興味尽きない。真夜中でもガス灯をつけてタバコや串ざし肉を売って、必死に生計を立てている人がいるかと思えば、他方では、ベンツを乗り回す金持ちもいる。一見、ヨーロッパ人と同じような近代的生活をしているようで、もう一方では、占師の言うことをそのまま信じる…。監督のムエゼ氏は、この映画の前に、キンシャサの人々の生活を描いた短編を制作している。これも、ドキュメント風でありながら、実は都市の矛盾をするどく突いている。本人は否定しているが、本当はやはり、かなりの社会派なのではないか。ただし、理性に訴えるというタイプではない。あるいは、どんな題材を取り上げようが、社会を映す限り、社会的にならざるをえないということか。たとえ、無意識であれ。

この映画のもう一つの特徴は、有名なミュージシャンを俳優として用いたことだ。上で述べたパパ・ウェンバはもちろんのこと、アンピール・バクバ（クバ帝国）のペペ・カレやエモロ。ナイトクラブの太った歌手が、アンピール・バクバのリーダー兼歌手のペペ・カレで、道で焼肉を売り歩いている小人がアニマテール（音頭取り）のエモロである。このアンピール・バクバは、今おそらくザイールで一番人気のあるバンドではないだろうか。（１９８９年夏の時点では、新生コフィ・オロミデと人気を二分していた）。

監督のムエゼ氏は、ザイール東部のキヴ州の出身である。州都ブカヴから少し南に行ったところにあるングェシェ地方のシ族だ。余談になるが、私がザイール

で長いこと調査しているのも実はキヴ州で、とりわけシ族の隣のテンボ族の言語と深く係わってきた。テンボ族とシ族は、政治体制としては別の社会を形成しているが、言語的にはお互いよく似ている。少し気をつければ、テンボ人はシ語を、またシ人はテンボ語を話すことができる。そういうわけであるから、また、彼とは年齢がほとんど同じということもあって、家に招かれた時も結構気が合い、フランス語やスワヒリ語のみならず、シ語もポンポン飛び出すという始末であった。もっともこれには、フランス人である奥さんの手料理とめずらしい地酒という完璧な舞台装置が揃っていたからかもしれない。

そんなわけで、インタビューというより、対談みたいになってしまった部分が出てきてしまった。しかし、ここでは、なまの声を出すという意味でそのままにしておいた。そこで、以下、Mをムエゼ、Kを私ということにする。

１２月の半ば、ザイールから日本への帰路ブリュッセルに寄った時も、出会いはまたギリギリであった。彼はパリに行っていて、帰ってきたのは私の出発の前日であった。出発の日、ザーベンタムの空港のセルフサービスのレストランで、飛行機が遅れたのをいいことに、ザイールと日本でのそれぞれの話を肴に大いに語り合ったが、その話はここでは省略せざるをえない。

なお、インタビューはフランス語で行った。

☆

K：あなたは１１月に東京で催されるアフリカ映画祭出席のため、日本に行くとうかがいましたが、その前に日本の皆さんにご紹介しようと思い、こうしてインタビューさせていただくことにしました。

おうかがいしたいことはいくつかあるのですが、まず、どういう理由で映画監督になったかお聞かせ下さい。こういった質問はちょっとおおざっぱだし、また、あなたの人生全体に係わることなので、一言では言えないとは思いますが…。ですから、ご自分で自己紹介をするということでお答え下さればいいと思います。

M：自己紹介する一番いい方法は、まず名のることですね。

K：ええ。

M：私は、ンガングラ・ムエゼと言います。ンガングラというのは私の父の名で、

ムエゼが私自身の名前です。また、ディユ＝ドネというクリスチャン・ネームもあります。しかし、あなたもご存じのように、ザイールでは１９７３年から、ヨーロッパ風のクリスチャン・ネームをつけることは禁止されていますから、この名前を言う時は、“昔の”という但し書をつける必要があります。それで、旧称ディユ＝ドネというわけです。

私は１９５０年に、ザイール東部のブカヴで生まれました。そこで、初等教育と中等教育を終えました。中・高校はあなたもご存じだと思いますが、コレージュ・アルファジーリです。これは、ジェズイット派の神父のつくった学校で、当時はノートルダム・ド・ラ・ヴィクトワールといっていました。

あなたは、私がなぜ映画をつくるようになったか、その理由を質問されましたね。

K：ええ。

M：コレージュの学生だった頃から、もう将来は映画をつくるんだと決めていた、と言えば、ちょっと嘘になるでしょうが…。

K：当時はよく映画を見たんですか。

M：ええ、見ました。コレージュの時にはじめて映画に興味を持ったんですが、実は、その学校に二人のベルギー人の先生がいて、これはジェズイット派の神父なんですが、大変な映画好きでした。そして、シネクラブをつくって映画を上映していました。私は、映写機をまわすのを手伝ったり、また、みんなが教室で勉強している時に、映写機をいじったりしていました。また、その先生はとにかく映画が好きだったので、フランス語の小論文の時間などは、普通のテーマではなく、自分たちが見た映画の分析をやらせるという具合いでした。

K：どんな映画を見たんですか。

M：私が覚えているのは、古典、特にフランスの古典ですね。とりわけ鮮明に覚えているのは、エイゼンシュタインの『戦艦ポチョムキン』です。また、ルネ・クレマンの『禁じられた遊び』、それから、ジャン・ギャバン主演の『大統領』などもよく覚えています。

K：つまり、映画の道に進んだのには、学校の先生の影響があったというわけですね。

M：もともとのところ、ということではそうですね。というのは、映画というの

は、単に出演者だけで成り立っているのではなくて、その裏に一連の仕事があるということをわからせてくれたからです。

コレージュを出てから、ベルギー政府の奨学金の試験を受けたのですが、運よくそれに通りました。当時は、受かる人はきわめて稀で、非常にラッキーでした。そこで、何を勉強したいかと問われたので、私は映画に裏方の仕事があることもわかっていたし、またザイールではできないことを勉強したいと思っていたので、ほとんど何も知らずに、映画の勉強をする学校はありますか、と尋ねたのです。今から考えると、その時がはっきりと自分は映画をやるんだと意識した時ですね。

試験官たちは、ブリュッセルにそういった学校が二つあり、カリキュラムを取り寄せてもいいが、どういうことがやりたいか、と尋ねました。と、問われても私としては、カメラマンが何をするのやら、監督とはどんな仕事なのか全然知らないのです。

K：むしろ、俳優になりたいとは思いませんでしたか。

M：いやいや、演技には興味がありませんでした。私としては制作者側にいたかったのです。創り出す側の。でも、それが実際どんな仕事かはよく知りませんでした。知っていたのは、ただカメラの背後に一連のやるべきことがあるということだけでした。

K：ということは、映画の技術面に興味があったということですか。

M：いや、技術的側面は私が考えていることを表現する手段ということでしか興味はありませんでした。それに、技術や形式美に頼りすぎることは、映画にとって危険だと考えていました。私にとってこれらは、映画でもって表現しようとする考え、思想を表す手立てにすぎないのです。もちろん、映画監督ですから、フィルムの編集のため、カメラや録音のことは多少はわかっていますが。この方面では、カメラマンや録音技師などの技術スタッフと連絡を密にしてやっていくということです。もちろん、技術がますます進歩しやさしくなるおかげで、仕事もやりやすくなるということはあります。

K：次に、ザイールの映画事情についてお聞かせ下さい。アフリカの他の国と比較して、また、ザイールにおいて他の芸術的表現、たとえば演劇、小説、音楽などど較べた場合、映画はどのような位置を占めますか。

M：この点について非常に特徴的なことは、アフリカはどこに行ってもザイール

音楽が聞かれるということです。私は今朝ガボンのリーブルヴィルから帰ってきたばかりなのですが、ガボンはザイールからそれ程離れていないとはいえ、ラジオからポンポン、ザイール音楽が聞こえてきます。

K：ガボンでもそうですか。

M：ガボンだけでなく、どこへ行ってもそうです。

K：それはザイール人のミュージシャンが演奏しているということですか、それとも、たとえばガボン人がザイール風に演奏しているということですか。

M：レコードです、ザイール人の。また、ザイール人以外の演奏する曲もあります。しかし、これはザイール現代音楽の一種の模倣です。もっとも、模倣というのはちょっと言い過ぎかもしれません。というのは、ザイール現代音楽もラテン音楽、ハイライフなどの模倣であり、まったくザイール的というわけではなからです。いずれにしろ、ザイールにおいては芸術的表現ということでは、まず音楽があり、これが一番重要です。

次に、大衆演劇ですが、これも非常に発達しています。たとえば、キンシャサのような都会ではアマチュアの劇団がいたる所にあります。なかには、テレビに出演するのもあります。特に、コメディー劇ですが。

K：これは、ラジオでもやっていますね。たとえば、ブカヴではカパラタ。

M：そうそう、カパラタ。まだやっていますか。あれは私が小さい時によく聞いたもので、もう３０年も昔のことです。まだやっているんですか。

K：少なくとも、この前私が行った時はそうでした。

M：まったく、驚きですね。要するに、ラジオにしろテレビにしろ、コメディー劇がよく行われています。また、小説もあります。

こういったものに較べれば、特に音楽は流行の中心地的役割を果たしていることを考えれば、ザイールの映画はきわめて遅れています。１９６０年の独立以前に、すでにザイール大衆のための映画が存在したということを考えれば、なおさらです。これは、主としてベルギー人神父によって作られたもので、教育的目的を持ったものでしたが、当時のアフリカでは一般向けの映画が作られるということ自体きわめて稀なことでした。

独立後ベルギー人が去ると、思想面でも、技術面でも彼らの後を継ぐザイール人はほとんどいませんでした。それに、彼らのフィルムが上映禁止になったとい

うこともあって、活動は完全にストップしました。ブルキナファソやコートジボアールなど、他のアフリカ諸国に較べて、ザイールは映画の分野では遅れています。

それに対して、テレビはザイールではよく発達しています。放送も多いし、設備も立派です。ただし、制作するのはドキュメントものだけで、ドラマはありません。

長編映画ということでは、『人生は楽し』はザイールでは三番目のものです。最初のものは、『偶然は存在しない』という題の白黒映画で、制作者たちも当時はまだアマチュアでした。ですから、この映画はまったくインパクトを与えることがなかったし、配給もダメでした。そのあと、マンブジンガという人が『ンガンボ』という映画をつくりました。これは、若者に正しい性知識を与えて、無用な出産を防ぐという教育的目的をもってつくられたものです。ですから、配給も学校関係のみという限られたものでした。

ですから、今回の『人生は楽し』は、普通の劇場で上映された最初のザイール映画ということになります。また、本格映画としても最初のものです。たとえばサイズに関しても、これは３５ｍｍですが、それ以前は全部１６ｍｍです。また制作に関しても、ザイール人以外の十分に経験を積んだ技術スタッフに協力を求めたし、素人の映画とはまったく異なります。ですから『人生は楽し』は、プロによるザイールの最初の長編劇映画ということになります。

Ｋ：つまり、こういうことですか。ザイールの現代文化では、まず音楽がある。だから、映画のテーマもパパ・ウェンバを起用するなど、ミュージカル仕立てにした…。

Ｍ：あなたの質問の意図はわかりますが、芸術家になぜそのテーマを選んだか、理由をはっきりと述べさせるのはなかなか困難です。必ずしも、意識しているわけではないのです。でも、強いてあなたの質問に答えようとすれば、つまり、自分の創造のプロセスを合理化すれば、実際、キンシャサを舞台にした映画をつくる場合、音楽なしではありえないということです。私自身はキンシャサ人というわけではなく、キンシャサに出てきたのは１９７６年の終わりですが、キンシャサという街はすぐに人を虜にする何かを持っています。外国人でもそうですが、私はザイール人ですから、なおさらでした。特に音楽は、どこに行ってもある。

ですから、キンシャサで映画を撮るということは、音楽がきわめて重要な要素になるとすぐ思いました。

キンシャサという街は、エネルギッシュな大きな町で、様々な文化を背負った人が集まってきます。キヴ、エクアテール、バ・ザイール、カサイ…。そして、彼らは一緒に住まざるをえないわけですが、ある意味で“新参者”として、伝統文化ではない、かといってヨーロッパ文化でもない、新しい文化を創り出していかなければならないのです。この点において、ザイールの現代音楽は人の間をつなぎ、共同体をつくっていく役割を果していると思います。

この音楽はリンガラ語で歌われていますが、内容は都市的でありながら、きわめて日常的なことを題材にしているので、いろいろな地方から出てきた人にも共感を呼ぶし、その中に浸ることができます。確かに、小説、劇にもそういった面はありますが、いかんせん対象がきわめて限られています。最近は、テレビも普及しましたが、音楽程ではありません。

K：実際、音楽はどこででも聴けますものね。

M：キンシャサのような町では、どこででもというわけではありませんが、特定の地域ではどこででも聴けます。

K：いや、私が言っているのは、たとえ村においてさえラジオのあるところではどこででも聴こえてくるということです。

M：そうです、そうです。音楽はどこででも聴けますが、テレビはどこででもというわけにはいきません。私は、村々で、歌の歌詞を理解するためにリンガラ語を習ったという人を何人も知っています。

K：次に、あなたの監督された映画についてですが、これはアフリカでは、またヨーロッパででも、大変評判になったとうかがいましたが。日本でもそうなると期待しています。

M：そうなるといいですね。確かに、あの映画はアフリカではかなりの反響を呼びました。実際、ブルキナファソのような西アフリカの国でさえ、興業成績は抜群でした。そして、配給業者に最大の利益をもたらしました。

K：あなたではなくて、配給業者にですね、残念ながら。

M：ええ、配給は私ではなかったんです、残念ながら。でも、それはあまり気にはしていません。私にとっては、一般大衆に受けたということが重要だったし、

それで満足でした。

リーブルヴィルでは私が配給者となったのですが、非常にうまくいっています。実際、リーブルヴィルのラジオを聴いていたら、おとといアンゴラとガボンのフットボールの試合があって、ガボンが勝ったのですが、選手たちはきのうは休息もせず、映画館に『人生は楽し』の映画を見に行ったと言っていました。ですから、この映画はある意味で、現代アフリカ人の欲求にマッチしたということでしょう。

ベルギーでも大変成功しました。これは恐らく、ベルギーとザイールの関係、つまり、ベルギーにはたくさんのザイール人がいるし、またザイールにもたくさんのベルギー人がいるということによるのでしょう。

フランスでは反響はもうひとつでした。最近ではイギリスでも上映されましたが、こちらは正確な数字はわかりませんが、フランスよりはよかったようです。カナダでもモントリオールで、商業的に上映されましたが、成功でした。

K：この映画はパパ・ウェンバ主演のものでしたが、ペペ・カレや例の小人のエモロも出ていましたね。

M：この映画がアフリカ大衆の期待に応えたということの大きな理由は、すでに脚本にあったと思います。私は個人的に、アフリカの映画人は必ずしも大衆との接触が多くないと思っていたので、これは大衆側の映画ということを意識的にしたのです。ですから、まず考えたのはザイールで、そしてアフリカで人気のある俳優を用いるということでした。脚本では、パパ・ウェンバやペペ・カレ、エモロの役割は前もって決まっていました。そして、彼らが本名で出演すると言ってあったのです。あとは、それ以外の役者を付け加えるだけでした。そして、うまくいきました。

前に、バマコに行った時のことですが、エモロがバマコであんなに有名だとは知りませんでした。実際、バマコで最も名前の知られているうちの一人なんです。バマコのような町でこの映画が成功した理由は、エモロが出演していたからです。驚いたことに、エモロのことを歌ったバンバラ語の流行歌さえあるのです。ですから、彼らにとってこの映画を見に行くことは、エモロを見に行くことでした。私は、パパ・ウェンバその他を通じてこの映画の宣伝をしていましたが、エモロには予期せぬ効果がありました。なにしろ、誰もが知っているのですから。これ

は、彼らがバマコでコンサートを開いたからかどうか知りませんが、特別印象が大きかったようです。いずれにせよ、馴染みのある人が映画に出て、それをみんなが見に来てくれるというのはうれしく思いました。

K：ところで、映画の中でカビビの役をしていたあの美しい女性は誰ですか。

M：彼女は、ビビ・クルーブワという人です。あの映画には、どうしても美しい娘が必要でした。オーディションを何回もやったのですが、これはというのがいませんでした。それで、録音技師やカメラマンなどスタッフ全員で相談しているうちに、関係者の一人が、弟のガールフレンドだけどと言って、一人の女性を連れて来たのです。撮影開始の二日前です。そして協議の結果、彼女でいってみようということになりました。そこで、私はベヌワ・ラミーと、他のスタッフが打ち合せをやっている間、彼女にテスト兼、演技指導をやったのです。結果は上々でした。おもしろいのは、彼女のあだ名はビビというのですが、映画の中ではカビビという名前はすでに決まっていたのですが、それに合わせるには、ただ「カ」という接頭辞をつければよかったということです。彼女の昔の名前はブリジットで、家族はそれをもじって、ビビと呼んでいたんですね。

K：カビビという名前は、ザイールではどこにでもある名前ですね。

M：そうですね。特に、ブカヴでは独立後の６０年以降、急速に現れた名前です。理由はなぜだかわかりませんが、多くの女性が子供にこの名前をつけるようになりました。意味は、“小さなマダム”ということですね。

K：ところで、次の映画の計画はもうありますか。

M：ええ、もちろんです。次の映画の舞台はここブリュッセルのアフリカ人街です。

K：いわゆるマトンゲですね。

M：ええ。これはコメディーなんですが、ずっとドラマティックです。というのは『人生は楽し』と違って、悲しい内容なのです。アフリカの伝統的王様の話なんですが、ベルギーに留学させた娘から長いこと便りがないのでザイールから娘を探しに出てくるのです。そこで様々な文化的摩擦に出会います。娘は色々ないきさつから、売春をやるまでになり、また警察の密告者でもあるのです。そして、父親はずっと娘を探すのですが、ある場所以外は…。そして、ついには父親も酒に溺れるようになる。でも最後はハッピーエンドで、安心してアフリカに帰るというストーリーです。

K：先程あなたは、学生時代、映画を勉強している時、日本映画も見たとおっしゃいましたが、日本映画に興味はおありですか。

M：大変興味はありますが、そんなに見たわけではありません。よく印象に残っているのは黒沢監督の『生きる』です。古い映画ですが、当時魅了されました。また『楢山節考』も非常にいい映画だと思いました。日本映画はよく発達していますから、これで十分というわけではもちろんありません。

日本映画は、われわれアフリカ人にとって重要です。というのは、この世にはアメリカやヨーロッパ文化以外のものもあるということをわからせてくれるからです。日本は一方では伝統文化をよく残しながら、他方では技術などを発達させ、両者をうまくかみあわせているように思えます。アフリカでは、伝統文化は時代遅れのダメなもので、現代文化がそれにとってかわらなければならないと思われています。でも、それは正しいことではありません。両者を融合させ、生きていくことが重要です。電話もいいけれど、タムタムの伝達もいいものです。両者を調和、維持していくことが必要です。日本はそれに成功した例です。

日本のことはよく知りませんが、ひどい面もあるようですね。ベルギー人の友人のフィルムを見ると、地下鉄の中で人が疲れて眠っていたりして…。

K：新聞を読みながら…。

M：まあ、どんな国にもそれなりのことはありますが。

K：最後に、アフリカで映画をつくる際の困難、問題点などがありましたらお聞かせください。

M：問題点はたくさんあります。まず第一は配給の問題です。配給体制ができていないのです。これは大変な阻害要因です。というのは、配給面でしっかりした体制がないと、制作者にお金を出させるのは困難です。先程、私がリーブルヴィルへ行ってきたという話をしましたが、これはガボンの国立映像センターに務める知己の同業者と全アフリカ映画人連合の事務局の友人が、私とコートジボワール人の二人の監督を招いてガボンの人たちに私と彼の２本の映画を紹介するというものでした。しかし、こういった風にしか事が運ばないというのは残念なことです。配給が個人的、職業的つながりにたよっており、興業がうまくいくという確証がどこにもないのです。

次に、このことと関連して、何かを創造するということに対してアフリカの国

々は十分な手立てを考えてきたとは言えません。ひとつ、ＣＩＤＣ（インターアフリカ映画配給企業連合）という機関ができましたが、残念なことに、これはあまりに国家的すぎました。つまり政治が関与するのです。そして運営面では政府に頼っていたため多くの誤りを犯しました。映画というのは、まず産業であり、たくさんのお金を動かす商売なのです。ですから、政府の都合でそのポストに人を送り込んだりすべきでなく、真にできる人、そしてそれに関心のある人を起用すべきです。このＣＩＤＣという機関は本来はブラックアフリカのフランス語圏全体をカバーすべきもので、ひとつの理想像でした。もし私が持っている全配給権をアフリカ全土で一度に売ることができたら、あとは一人で心を落ち着けて映画をつくることができるでしょう。それは、フィルムをかかえてアフリカをあっちこっちまわるよりずっといいものです。国によって勝手が違うので様々な苦労がありますからね。

また、アフリカ映画はちょっと堅すぎたことも問題です。アフリカ映画はヨーロッパの政府や協力機関に援助を受けて生まれたという特殊事情があるんですが、援助は受けても一般向けの商業映画をつくるには必ずしも十分な金額ではありませんでした。それで、映画はいきおい芸術祭参加作品となり、映画祭を渡り歩くのみで一般公開されず、見るのはごく限られた人達、実質的には批評家のみという有様なのです。しかもヨーロッパ人の。しかし、同じアフリカでも英語圏ではこういったことはなかったようです。

それに、これら初期のアフリカ人のつくる映画は当時のアフリカのかかえる問題、すなわち文化的なアイデンティーの問題などを取り扱うものが主流で、一般大衆向けの娯楽映画というものはありませんでした。それに配給の問題もあって、今日でも、たとえばザイールではアフリカ映画を見るというと、文化センターに行かざるをえないという具合いです。そしてタダで見る。映画人が映画を通じて訴えるというタイプのものはそれなりの価値を持っていますが、それだけではダメだと思います。しかし現在では状況は変わりつつあります。

言語の問題もアフリカ映画がかかえる大きな問題です。私はングェシェ地方出身で、母語はシ語ですが、この言語で映画をつくるわけにはいきません。もちろん、田舎にとどまって映画活動はできないので、随分前に故郷を離れたということもあります。しかしもっと大きな問題は、採算性の問題です。シ族だけを相手

にしていたらとても採算はとれません。スワヒリ語でなら、もう少し広い地域をカバーするので少しはましでしょうが、それでも国全体というわけにはいきません。リンガラ語ででも同様です。またひとたびザイールを離れると、これでは人に理解してもらうことはできません。他方、フランス語は俳優が日頃それで生活しているわけではないので、表現が自然ではなく、まずくなります。ザイールではこうですが、別の国ではまた別の言語の問題があるでしょう。

K：これはノーベル文学賞をとったナイジェリアのショインカも同じことを言っていましたね。なぜ英語で書くのかと聞かれて。

M：これは非常に深刻な問題です。すぐには解決策は見つからないでしょう。『人生は楽し』の場合はこうしました。つまり、キンシャサでは人はリンガラ語を話しているのですが、このリンガラ語の中にはフランス語がかなり入っています。４分の３がリンガラ語で４分の１がフランス語といった割合でしょう。映画ではこの割合を逆にしました。つまり、リンガラ語は４分の１で、４分の３がフランス語です。これがおそらくザイール国内だけでなく、他のアフリカのフランス語圏でも受けた理由でしょう。字幕スーパーは必ずしも感心しません。普通の人にとって、映画を見ながら文字を追いかけるのは疲れるものです。

K：どうも長々とありがとうございました。今日はこれで終わりにしたいと思います。特に、今朝ガボンから帰られたばかりだというのに…。

M：いやいや、そんなことはありません。昼間１時間ばかり眠る時間がありましたから。お礼を言うのは私の方です。日本人で私の母語で挨拶をする人がいるとはほんとうに驚きでした。ちょっと世界観が変わりましたね。

K：世の中が段々とインターナショナルになってきたと思いませんか。たとえば、ぼくは日本人でザイールの研究をやっていて、ブリュッセルに立ち寄る。そこにはベルギー人もザイール人もたくさん友達がいて…。あなたはザイール人で、ベルギーに住んでいて、今朝ガボンから帰ってきたばかり。そしていろいろな所に友達がいる…。

M：そして、嫁さんはフランス人だし…（笑）。私は、あなたに息子にシ語とスワヒリ語を教えていただこうと思っているんですよ（笑）。

K：それでは気をつけて日本へ行ってらして下さい。そして滞在が楽しいものであることを祈っています。

M：私も、あなたに私の故郷で楽しいひとときを過ごされることを祈っています。

K：それでは１２月にここでまたお会いしましょう。

M：その時は、私はあなたに東京でのことをお話しし、あなたは私に故郷のキブ州のことを話して下さい。

K：どうもありがとうございました。

☆